

感染症 治療法なくなるかも

抗生物質の乱用やめて／「耐性菌」出現率高まる

四国中央市・ふじえだファミリークリニック 藤枝 俊之

抗菌薬（抗生物質）は主に細菌に対して効果があるものですが、風邪の多くはウイルスが原因のため、抗菌薬は効きません。1980年以降、抗菌薬の不適切な使用により、抗菌薬が効かない細菌（薬剤耐性菌＝AMR）が増えていることが世界規模で深刻な問題になっています。

現在のペースでAMRが増加、まん延すると、適切に治療すれば軽症で回復できた感染症も治療が難しくなり、重症化、さらには死に至る可能性が高まります。2050年には世界でAMRによって1,000万人が死亡し、がんによる死者を追い抜くとも想定されており、1928年のペニシリン開発以前の「抗菌薬が存在しない世界」に戻ってしまうとの懸念が国際社会で表明されています。

免疫力の弱い乳幼児や妊婦、高齢者、持病のある人は特に感染症が重症化しやすく、AMRが広がり有効な抗菌薬が減ると、命の危険が高まります。医療の現場では、必要のない抗菌薬は使わないという取り組みが求められています。必要のない抗菌薬を服用することで、体内にいる細菌が抗菌薬に耐性を持つ可能性が高くなります。

また、抗菌薬の服用を途中でやめるなど自分の判断で服用方法を変えてしまうと、体内に残った細菌から耐性菌が出現する可能性が高まります。こうして生まれたAMRを知らないうちに周囲に広げてしまうと、やがて身近な家族や友達を含む世の中から、感染症に対する有効な治療法がなくなるかもしれません。

発熱が治まってもしばらくは病原体を体から出し続けているため、すぐに集団生活をすることは避け、不必要に感染症にかかる機会を減らし、病原体を周りに広げないようにすることも大切です。

一方、目には見えませんが、細菌は喉や皮膚、腸管など至る所で常在菌として日ごろから人間と共存し、他の病原体侵入阻止やバリアー機能など人間にいい影響を及ぼしています。特に腸にはその9割がすみ着いており、千種類計約100兆個に及び、重さは体重の2%以上に匹敵するともいわれます。そして、たくさんの細菌がすんでいる様子が花畑（英語でflora）に見えることから「腸内フローラ」と呼ばれる細菌叢（そう）を形成しています。抗菌薬はその腸内細菌叢のバランスに変化を起こします。

近年、さまざまな疾患と腸内細菌叢の関連が注目されてきています。大腸がん、潰瘍性大腸炎など腸に関わる病気や、動脈硬化、糖尿病、肥満、アレルギー、うつ、リウマチや膠原（こうげん）病、認知症など、研究によりさまざまな病気との関連が解明されています。

抗菌薬乱用による腸内細菌叢の変化や、親子間で受け継がれていくヒト常在細菌叢の変化により、さまざまな病気の発病リスクが増えることも懸念されています。その意味でも幼少期からの適正な抗菌薬の利用が大切です。

愛媛新聞「健康ファイル」

令和5年9月18日(月)掲載